

滋賀県では昨年、バリアフリーの思想でつくられた「福祉のまちづくり条例」をユニバーサルデザインの視点を盛り込み改正した。条例名は「だれもが住みたくなる福祉滋賀のまちづくり条例」。前文には「すべての人が円滑に利用できるよう配慮された生活環境を整備することにより、だれもが自らの意思で自由に行動でき、安全で快適に生きがいを持って暮らすことができる福祉のまちづくりを進める必要がある」と明記されており、目指すべきベクトルは滋賀県型ユニバーサル社会の構築といえる。



●1938年滋賀県生まれ。1959年、滋賀県立短期大学農学部卒業。1966年中央大学法学部卒業（通信教育）。1976年滋賀県庁入庁。健康福祉部長、総務部長を歴任後、1998年退職。1998年より現職、現在2期目

マザーレイク「びわ湖」とともに 自然と人間が共に輝く モデル創造立県

滋賀県知事 **國松善次**さん
聞き手 梶本久夫 本誌編集長



ユニバーサルデザインの考え方が盛り込まれている「滋賀県中期計画」-自然と人間がともに輝くモデル創造立県・滋賀-



今年2月、「地域福祉をより確実に！」をテーマに大津市で開催された「アメニティフォーラムinしが8」

だれもが住みたくなる福祉滋賀の まちづくり条例

県庁内の喫茶店「四季の森」で珈琲を飲んでいましたが、知的発達障害のある人が生き生きと働いている様を見て、彼らの働く場を県が率先して確保しているんだと思いました。

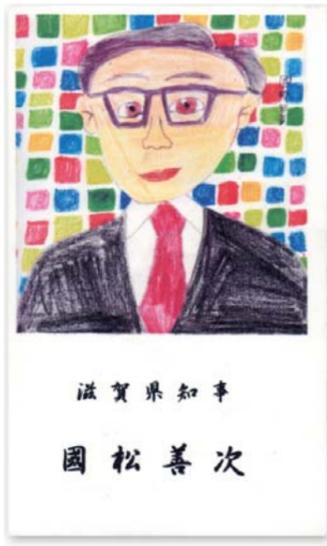
國松 そうですか。知的発達障害といえば、私の名刺は知的発達障害児が描いた絵画をメインにデザインしたものです。

昨年、「福祉のまちづくり条例」を改正しましたが、どのような理由からですか。

國松 改正前の条例名は「滋賀県住みよい福祉のまちづくり条例」です。バリアフリーの思想をコンセプトとして、ハンディのある人でもさまざまなところに出かけられる環境づくりが目的でした。

施行時の1994年の時点ではこれでよかったのですが、バリアフリーからユニバーサルデザインへの波が急速に広がったこともあり、もっと対象者を広げて、だれもが参加できる社会づくりのための条例にしたいという思いが募りました。それで、ユニバーサルデザインの理念を盛り込んだ条例改正に着手したわけですが、ユニバーサルデザインという言葉は関係者にはよくわかるが、一般市民にはわかりづらいという批判を浴びました。

滋賀県では条例により、県民政策コメント（パブリックコメント）の聴取が義務づけられていますが、ユニバ



知事の名刺に使用されている似顔絵は中西弘さん（グループホームはのん/おしま学園・北海道）の作

國松 だれもがより幸福に生きたいと願うのは当然ですが、**条例名のようなユニバーサルな社会を実現するために、市民1人ひとりの生活者としての行動が重要になりますね。**

ユニバーサルデザインを推進するには、県民に積極的に働きかけることが必要との意見がありました。内容を変えるだけではダメ。改正の内容を鮮明にし、県民総ぐるみで取り組んでいくという強い決意を示す意味から、新条例名は「だれもが住みたくなる福祉滋賀のまちづくり条例」です。自分自身、所轄の委員会に向いて、ユニバーサルデザインの精神をよりわかりやすくかたちで表現することの意味を説明しました。言葉として理解するだけでなく、みんなが関心をもち、それに向かってアクションを起こしてください。そうしなければ、条例名にあるような社会はできませんと力説しました。そのかいあって、昨年7月の議会において全会一致で議決されました。



障害者施設のイベントで園生にプレゼントを贈る知事は、福祉のエキスパートでもある



知事は年間1回程度、びわ湖一周のサイクリングを行う。地域の人々との触れ合いが、明日への活力を生む



滋賀県には古い街並みや伝統芸能がたくさん残っている。写真の富田人形浄瑠璃もそのひとつだ



時々刻々、四季折々に異なった美しさを表す「マザーレイクびわ湖」

「宇宙船びわ湖号」のクルーは 市民、行政、事業者

南の社会から学ぶべき点は少なくありません。例

になってしまい食文化が変わった。顔は日本人だが、身体のDNAはこれでもいいのか。戦後の社会はご馳走を食べるだけで、筋肉を使わない人間プロイラーを大量生産してきたともいえるのではないのでしょうか。われわれは東洋の自然観に立ち戻るべきです。

アジアでは人間は自然の一員ですが、欧米では自然とは対峙し闘うものとの認識があります。ユニバーサルデザインはアメリカで生まれた概念ですが、アジア的に、日本的に磨き上げる必要があります。20世紀を反省し、自然と人間が共に輝くエコ文化を創り上げていくことが重要です。

例えば、昨年訪問したブラジルのクリチバ市では「燃える」「燃えない」ではなく、「資源ゴミ」と「それ以外」で「ゴミを分別しています。資源ゴミをもっといけば野菜やバスケットと交換してくれるので、回収率は先進国以上です。」

国松 県庁の仕事も今までの常識にとらわれてはいけません。学ぶべきところは学ぶ。生活者原点、納税者の視点に立つことはもちろん重要ですし、たいていの解決策は現場にあるので現場からの発想を大事にすべきです。今まではモデルがあつて、そのモデルに追い付け追い越せでよかったが、今の時代はモデルがありません。滋賀県の面白いところは県土の真ん中にびわ湖があり、その回りを山が囲み、山の稜線が県境になっていることです。山、平野、湖からなる小さな宇宙ともいえるでしょう。自然と人間がどのように生きるかの実験船「宇宙船



「スペシャルオリンピックスin長野」の滋賀県トライアثلンのスタート地点はびわ湖畔の「におの浜ふれあいスポーツセンター」前



庁舎内に設けられた喫茶店「四季の森」は、知的発達障害者の雇用の場を確保する役割も果たしている

が、行政サービスの中でその願いをすべて成就しようとしても無理があります。団塊世代が高齢期に突入すると、増大する福祉コストは賄いきれなくなり膨らんだ風船を破裂させる大きなエネルギーである彼らにどうしてもらおうか。

社会の安全装置がバラバラになろうとしている今、発想の転換が必要です。サービスの受け手としてだけでなく、支え手になってもらう。新しい条例は当然のことながら、障害のあるなし、年齢にかかわらず、誰もが主役の社会づくりを念頭に置いています。

東洋文明に立ち返り 自然との共生を見つめ直そう

知事は「物から心へ」とおっしゃっていますが、戦後60年を経過して、日本人の文明史観を今一度見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。

国松 明治維新以来、西欧文明が私たちの物差しでした。しかしここに来て、豊かさをもの量で測ることができない。西欧文明のひずみが地球上で露呈しています。物質文明は地球を壊しているのではないか。ものの豊饒さが本当の満足につながるのか。さまざまな課題が、現代社会

に突きつけられています。ご馳走を食べて、多くのものを所有すればするほどかえって苛立ち増幅する。人々の表情は、ものをそれほど所有していなかった昔のほうが豊かではなかったか。

21世紀の最初の年に行った年頭挨拶で「物から心へ」「人間中心から自然中心へ」「大人中心から子ども中心へ」「戦争から平和へ」の4つのテーマについて話しました。今ここで本当の豊かさとは何かを、もう一度とらえ直すべきです。

東洋の自然観が世界に影響を与えるようになるの は、もうすぐですか。

国松 今年「京都議定書」の発効の年ですが、西欧文化がもたらした問題は世界の共通認識になっていきます。日本は東洋のDNAがあるのに明治維新以降、とりわけ20世紀後半の最後の四半世紀、アジアの民族が本来もっているDNAを忘れてしまい、欧米文化に追い付け、追い越せで、人間も自然の一員であることを忘れてしまった。

三里四方で獲れるものを食すのが健康にいちばん良いと言われますが、戦後地球の裏側のもので食べるよう